

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

タイトル：「新出多言語資料からみた敦煌の社会」（平成 27 年度第 1 回研究会）

日時：平成 27 年 5 月 2 日（土曜日）午後 13 時半より午後 18 時， 3 日（日曜日）午前 10 時より午後 16 時

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 304 号室

報告者名（所属）

2日

1) 松井太（AA研共同研究員，大阪大学），荒川慎太郎（AA研所員）

「プロジェクト全体の進捗について」

成果刊行物の指針、今年度の調査活動の策定とともにプロジェクト全体の進捗を討議した。

2) 松井太（AA研共同研究員，大阪大学）

「敦煌諸石窟のウイグル語・モンゴル語題記銘文」

2010 年以來，報告者が継続的に調査・解読してきた敦煌諸石窟のウイグル語・モンゴル語題記銘文のうち，安西榆林窟の題記銘文の大部分について校訂テキスト・訳注の試案を提示し，不明・難読・難解な箇所について討議した。討議においては，正規メンバーからのコメントによって西夏語・漢語・チベット語題記銘文との共通点・相違点などを再認識するとともに，コメンテーターのメフメト=オルメズ（ユルドゥズ工科大学）・荻原裕敏（京都大学）・慶昭蓉（龍谷大学）の三氏からトルコ語仏教文献学および中央アジア・トカラ仏教学の視点に立つ助言を得て，内容理解を進展させることができた。さらに，成果刊行物としての内容・体裁についても意見を交換した。

3) 白玉冬（AA 研共同研究員，大阪大学）

「フフホト白塔のウイグル文字題記解読初案」

遼代に建造された中国内蒙古自治区フフホトの万部華嚴経塔（白塔）には，モンゴル時代に書かれた漢字・ウイグル文字・モンゴル文字・シリア文字などの多言語の題記銘文が数多く残されている。これらは敦煌石窟の諸言語銘文と比較参照すべき資料といえる。報告者は，2014 年 5 月・2015 年 4 月の現地調査に基づいて，これまで未発表・未公開のウイグル文題記銘文計 20 条について解読試案を提示し，敦煌やさらに西方の新疆地域，あるいは東方キリスト教（景教）徒との関係について指摘した。

4) 橘堂晃一（AA 研共同研究員，龍谷大学）

「敦煌石窟のブラーフミー銘文」

敦煌莫高窟と榆林窟にはブラーフミー文字の銘文が少なからず確認される。2014 年度の現地調査と P.ペリオの記録に基づいて銘文を解読したところ，これらがウイグル人僧侶アーディトヤセーナによって書かれたものであることが明らかとなった。ブラーフミー文字が“聖典文字”として使用されていたことを窺わせる。さらに 11 世紀の西ウイグル国のトルファン地域と敦煌仏教界との関係についても示唆に富む銘文があることを紹介した。

3日

5) 荒川慎太郎（AA 研所員）

「2014 年 12 月敦煌西夏文題記調査報告」

2014 年 12 月 22～28 日，報告者は莫高窟，榆林窟，五个廟などの石窟寺院内で西夏文題記の調査活動を行った。

のべ 59 窟の内、のべ 25 窟に不詳なものも含む西夏文が確認できる。報告者はこれまで、「莫高窟・榆林窟・東千仏洞西夏文題記訳注」（荒川 2010）、「西夏文題記に関する覚書」1-3（荒川 2011, 2012, 2013）で題記のテキスト化・訳注を試みたが、今回の調査を反映するアップデートが必要であることを述べた。今後の短期的な課題（新発見・再読結果を「覚書」4 で公開）、中期的な課題（荒川 2010 のテキスト全文の再整理）、長期的な課題（成果刊行物のスタイルに合わせて出版可能な状態に形成）をそれぞれ提示した。

6) 全員

「研究会と調査に関する打ち合わせ・成果刊行物編集会議」

コメンテーターも交え、今後の研究会と調査に関する打ち合わせを行うとともに、成果刊行物の編集についても討議した。